

加曾利貝塚

—県営桜木第二団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1986

千葉県都市部住宅課
財團法人千葉県文化財センター

加曾利貝塚

－県営桜木第二団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－

1986

千葉県都市部住宅課
財團法人千葉県文化財センター

序 文

千葉市内を流れ東京湾に注ぐ都川は、その支流が縱横に台地を開析し、古くから人々の生活に深い係りを持ち続けてきました。さらに西方に控える東京湾は、当時の人々に海の幸をもたらしていたことは市内に存在する多数の貝塚によって容易に想像できます。

とりわけ加曾利貝塚は、これら貝塚群の象徴的存在であるとともに、学術的にも著名な遺跡であります。つまり縄文式土器の編年上にみられる加曾利E式、同B式土器は周辺の土器群と比較する際の基本型式として広く知られているところです。

このたび、その加曾利貝塚の南側の工場跡地に県営桜木第二団地の建設が予定され、遺跡の一部に計画が及んでいたため県教育委員会は関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、計画変更を前提として昭和59年4月に確認調査を実施することとなり当センターが担当しました。その結果、建設予定地の大半の区域は、工場建設の際に削平されており、わずかに貝塚に隣接する北西側の一部区域に遺構が存在することが判明しました。このため北西側の区域の、遺構が存在する北側の部分を現状保存区域とし、遺構が確認されず遺物も少ない南側部分については記録保存の措置を講ずるということで協議が整い、同年10月から約2,200m²について本調査を実施しました。

調査の結果、遺物としては縄文時代の早期から後期に至る土器群とそれらに伴う石器等が若干検出されたのみで、遺構は検出されませんでした。

このたび、整理作業も終了し、報告書を刊行する運びとなりましたが、学術的な資料としてはもとより、文化財の保護、普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに、千葉県都市部住宅課の御協力と千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会の御指導、助言にお礼申し上げるとともに、現場での調査及び整理に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和61年2月

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 山 本 孝 也

例　　言

1. 本書は、県営桜木第二団地造成に伴う加曾利貝塚の発掘調査報告書である。
2. 調査は、千葉県都市部（住宅課）の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとに（財）千葉県文化財センターが実施した。
3. 確認調査は、昭和59年4月16日から同年6月30日、本調査は昭和59年10月1日から同年11月30日にかけて下記の職員により実施された。
調査部長 鈴木道之助 部長補佐 根本弘 班長 阪田正一 主任調査研究員 石田
広美、池田大助 調査研究員 宮城孝之、萩原恭一
4. 本遺跡の整理及び原稿執筆は、調査部長鈴木道之助のもとに部長補佐古内茂が担当し、池田大助、萩原恭一の協力を得た。
5. 本調査で使用した遺跡コードは201-055とした。
6. 本書に収録した図面の方位は座標北とし、第1図については国土地理院発行の1:25,000地形図、千葉東部（千葉15号-1）を使用した。
7. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで千葉県都市部住宅課、千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会の関係者各位をはじめ多くの方々から御指導・助言をいただいた。

本文目次

序文 例言

第1章 調査の概要	1
第1節 調査の経過と方法	1
第2節 層序	2
第2章 発見された遺構・遺物	5
第1節 遺構及び遺構出土の遺物	5
第2節 グリッド出土の遺物	10
1. 土器	10
2. 土製品	12
3. 石器	12
第3章 結語	23

挿図目次

第1図 周辺地形図	2
第2図 周辺現況図	3
第3図 調査区全体図	4
第4図 土層柱状図	4
第5図 001号址実測図	6
第6図 002・003号址実測図	7
第7図 006号址実測図	9
第8図 007号址実測図	9
第9図 遺構内出土土器・グリッド出土土器拓影図	14
第10図 出土土器実測図(1)	15
第11図 出土土器実測図(2)	16
第12図 グリッド出土土器拓影図(1)	17
第13図 グリッド出土土器拓影図(2)	18
第14図 グリッド出土土器拓影図(3)	19
第15図 グリッド出土土器拓影図(4)	20
第16図 出土石器実測図(1)	21
第17図 出土石器実測図(2)	22

図版目次

- 図版 1 1. 発掘前遠景
2. 確認トレンチ 東から (C2・3・4-00)
3. 確認トレンチ 西から (C2・3・4-00)
- 図版 2 1. 確認トレンチ発掘状況
2. 調査区北側土層セクション
3. 溝状遺構検出状況 (B3-85)
- 図版 3 1. 001号址検出状況
2. 001号址遺物出土状況
3. 001号址全景
- 図版 4 1. 002号址遺物出土状況
2. 002号址遺物出土状況
3. 002・003号址遺物出土状況
- 図版 5 1. 遺物出土状況 (C3-20)
2. 006号址全景
3. 006・007号址近景
- 図版 6 1. 遺構内出土土器・グリッド出土土製品
2. グリッド出土土器(1)
- 図版 7 グリッド出土土器(2)
- 図版 8 グリッド出土土器(3)
- 図版 9 グリッド出土土器(4)
- 図版10 遺構内・グリッド出土石器

第1章 調査の概要

第1節 調査の経過と方法

調査は確認調査と本調査にわけて行なわれた。まず確認調査は昭和59年4月16日から約2か月半を費して実施された。調査対象地はコンクリート工場撤去後の跡地であったため、工場の基礎材、廃棄された製品が一面を覆っており、かなり悲惨な状況を呈していた。遺跡の破壊の度合いを見るために、表面の観察で、最も破壊の著しいと感じられたD1グリッド西端に、南北50m、幅2mのトレンチを設定し調査を開始した。とりあえず人力により作業を開始したが、破壊の程度は予想以上にひどく全体にハードロームのかなり深い部分にまで基礎材が打ち込まれていたり、掘り込まれていたりで遺構があったとしても、その床面の検出さえ不可能な状態であった。これによって、全体の被破壊度にある程度の予想がついたため以後、上面の瓦礫以下、残りの良い部分では旧表土までを重機でとり除き、それ以下を人力で精査する方法に移行した。基本的には50mおきに幅2mのトレンチを東西・南北に走らせ、遺構の検出された場合及び比較的の破壊を受けていない所については、周辺を拡張して全容を出し、またトレンチの間隔を密にするかして対応した。その結果、調査区は南東の3分の2と北西の3分の1で、極端に様相の違うことが明らかにされた。南東部分は基礎材等によってハードローム中まで破壊を受け、特にひどい所では深さ3m近い大穴をあけて、廃材、その他の粗大ゴミを廃棄していた。また、工場の整地に伴うと考えられるが、検出されたハードロームの面は、一様に、カチンカチンに堅められていた。一方北西部は調査時は平坦にならされていたが工場建設以前には浅い谷地形となっていたようで、盛土によって整地されていたため、遺存状況は極めて良く、いわゆる新期テフラ層では多量の土器を包含していた。しかし遺構の数は少く、南貝塚寄りの所に若干集中して検出された程度だった。007号址は十字トレンチを入れただけに留めたが、他の遺構は全て完全に精査・記録を施した。そして、各トレンチ内の遺構の確認されなかった所には、任意 2×2 mの先土器確認グリッドを入れた。確認調査は同年6月30日を以って終了し、検出・調査された遺構は、全て仮埋め戻しを施し本調査開始時期まで待つことになった。

確認調査の成果をもとに、県教育委員会文化課と、県住宅課との間で協議が行われ、南東の遺物の希薄な部分については、予定通り団地を建設、北西部についてはその北半の遺構の集中していた区域を設計変更によって公園として保存することとした。この結果、南東部については、本調査を実施することとなり、同年10月3日より調査が開始された。本調査区域はまず上層全面を重機によって削除し、その後人力によって遺構の検出にあたった。遺存状況は比較的良好であったが、遺構は全く検出されず、包含層中に土器が検出されるのみであった。この部



第1図 周辺地形図 緯尺 1/50,000

分についても、下層の先土器時代の確認調査を行った。本調査は同年11月27日を以って終了し、保存区は山砂を用いて埋め戻しを行った。

第2節 層序

本遺跡での層序観察用グリッドは、先土器時代の試掘も兼ね、本調査区のほぼ中央を南北に通した約90mの長さを持つトレンチに2か所設定した。グリッドでいうと、B 4-64, C 4-04となる。それぞれ立川ローム層の最下部までは確認することとした。この周囲一帯は、前に

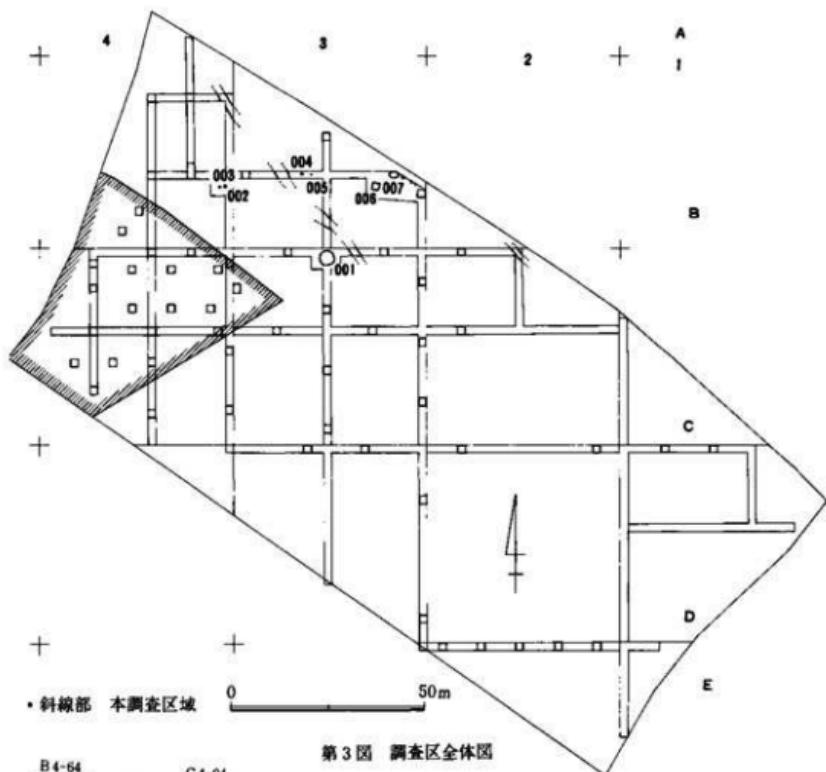


第2図 周辺現況図 縮尺 1/2,500

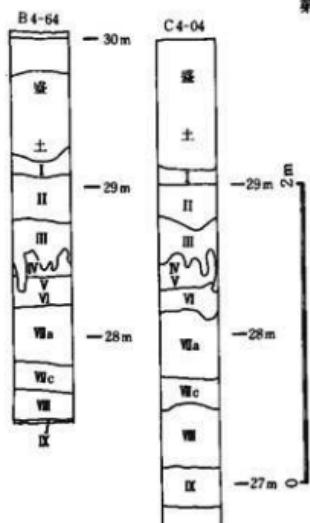
も触れたが工場敷地であったため盛土が著しく2か所とも約80cmの厚さで堆積しており、その下に造成当時の表土が堆積していた。B4-64での盛土は少なくとも3回以上にわたっており、かなり大規模な造成が行われたようである。次に順次表土以下の説明を加えておきたい。

第I層 黒色土。造成時の表土であり、10~20cmの層厚であるため造成時では若干削平されたものと思われる。

第II層 暗褐色土。上部には若干新規テフラの堆積が認められ、下部ではローム漸移層的な褐色土が薄い堆積を示していた。本層が繩文期の包含層にあたる。



第3図 調査区全体図



第4図 土層柱状図

第III層 黄褐色土。いわゆるソフトローム層であり、20~30cmの層厚を有していた。

第IV層 褐色土。ハードローム層に移り、上面は凸凹の著しいクラック帯を形成する。

第V層 褐色土。本層は第1暗色帯とも考えられているが、ここでは確認できなかつた。

第VI層 淡褐色土。褐色土中に白っぽい堆積土が僅かながら認められた。始良丹沢バシスの存在を肯定する土層となつた。

第VII層 暗褐色土。いわゆる第2暗色帯である。a~cの三層に細分できるというが、ここ

では明確な分層は不可能であった。ただ上下で若干の色彩の差が認められたため a 層, c 層とした。

第VII層 黄褐色土。粘性を有する堆積土で、これをもって立川ローム層が終了する。

第IX層 褐色土。土質は第VII層と類似し、色調において明確に差異を認めることができる。

以上が本遺跡での基本的な層序となり、周辺遺跡での堆積土と比較してもそれほどの相違は認められなかった。

第2章 発見された遺構・遺物

本遺跡の調査概要はすでに前述したが、本調査区域においては遺構は発見されなかった。報告の中心はもっぱら確認調査の際に検出された遺構及び遺物が中心となる。遺構は第3図に示したように確認調査北側でその大半が検出されており、住居址1軒、小堅穴状遺構2基、溝状遺構2か所の他ピット数個の構成となった。

第1節 遺構及び遺構出土の遺物

001号址（第5図）

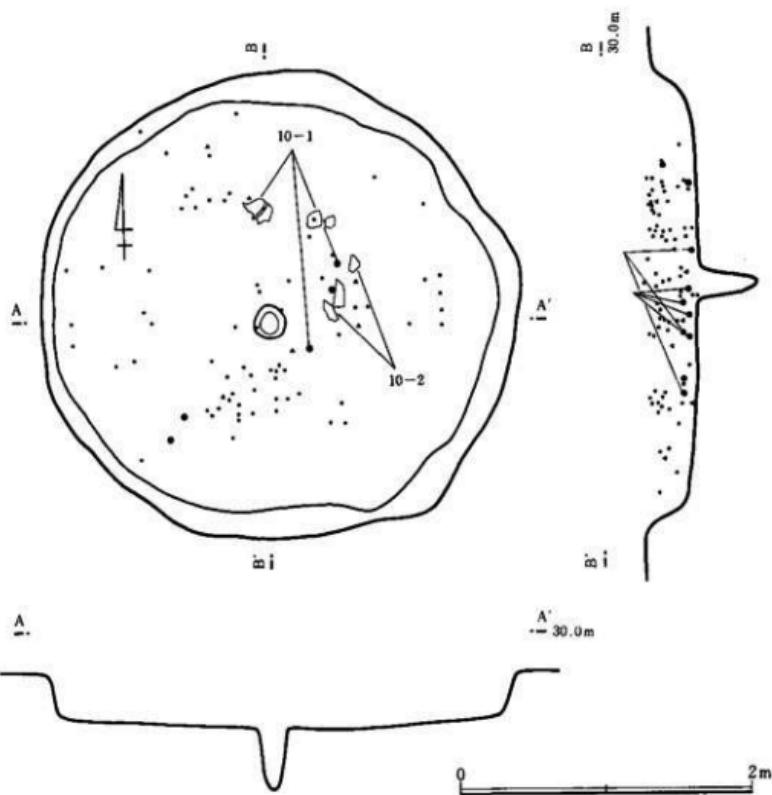
本址は確認調査時においてC3区の北側中央で検出された。平面はほぼ円形を呈し、径約3.2mの小形住居址となった。約30cmの深さで第III層のソフトロームを掘り込んで構築しており、床面は第IV層中に及ぶ。このため住居址自体は、床面とともにかなりしっかりしたものとなつた。ピットは中央に1個確認されただけであり、小形住居址としてはこの程度であろうか。また明確な炉址も存在しなかつた。後述するが阿玉台期の住居址であり、この期では炉址が認められない住居址がしばしば検出されるところである。

覆土は図示しなかつたが2層に分層できた。第1層は黒褐色土が中央部にむかって厚く、レンズ状堆積を示し、第2層の暗褐色土がその下部を覆う。むろん第2層は第II層の暗褐色土が流入したものであり、壁際では若干ソフトロームの流入も認められた。

出土遺物は中期の阿玉台式が主体となり、大形片の出土もあるところから本址の時期は阿玉台期の所産と見做される。図示した土器も床面付近の出土であり、構築時期を一層確定なものとした。土器の分布は覆土全体にわたっており、中期以降の遺物も多く含まれていた。なお、第5図中の黒丸は土器、黒三角は小縁の出土を示すが石器はスクレイパーを出土しただけであった。

遺物（第9図1、第10図1・2、第11図1、第16図8）

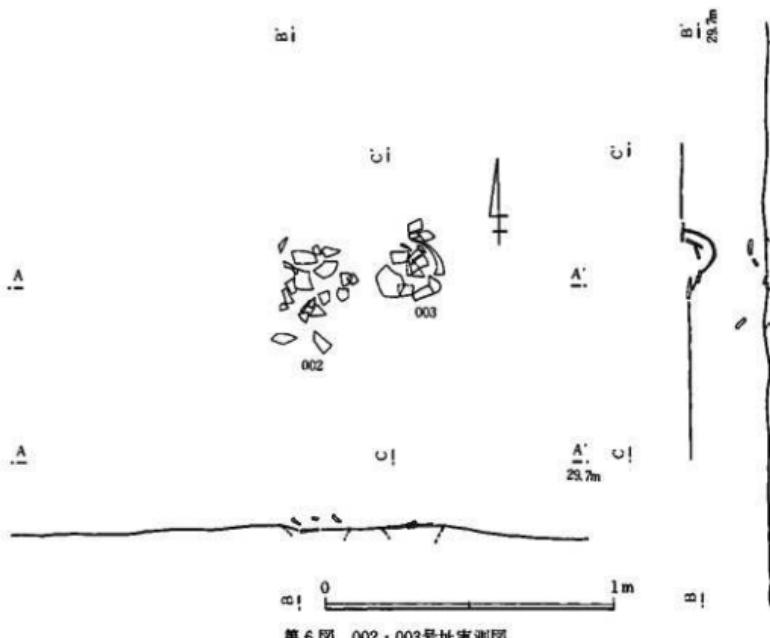
図示した土器は3点にとどめた。第9図1は阿玉台式の胴部片で、半截竹管による波状の沈



第5図 001号址実測図

線が施される。胎土には雲母のほか砂粒、小石を多く含む。第10図1は口縁部が約1/4遺存していたもので、大きな波状口縁に粘土紐を高く貼付する。文様は半截竹管による押引きで構成される。胎土には少量の雲母と多量の小石を含む。小石は白っぽいものが多い。第10図2は胴部だけが約2/5遺存する。文様は粘土紐を曲線状に貼付した隆帯とその両脇に付された連続押引文とにより構成される。胎土には砂粒と若干の小石を含み雲母は含まない。第11図1は阿玉台式の底部で、横方向に爪形文が巡り、隆帯の一部も残る。胎土は第10図1と同様で雲母だけを含まない。

石器が1点だけ出土した。縦長のスクレイバーで石材は黒曜石。つまみの一部が欠損するがほぼ完形品と言える。剝離は平行に近く、薄く丁寧に中心部まで行き届いている。床面付近から出土しているため住居址の時期と一致するとみてよいであろう。



002号址（第6図）

B4区の東側で003号址とともに検出された。当初、包含層中の土器と考えて調査を進めたが精査するうちに埋甕の様相を呈してきたため急速002号址と命名し、遺構として取り扱った。掘込みは、ほぼ土器の大きさに限定され、他の施設は認められなかった。

遺物（第9図2～4、第11図12）

拓影図と実測図で示したが同一個体である。接合はしなかったため、分離して図示した。文様は地文にRLの縄文を施こし、沈線により区画する。沈線間は磨消が入る。胸部の文様は弧線を交互に配したコンパス状文であり、いわゆる蒂縄文系土器の特徴であろう。時期的には安行I式の中に入ろうが器厚の薄さが目立つ。

003号址（第6図）

002号址の精査中に遺物が検出されたためとりあえず003号址として調査を進めた。002号址と比べてやや遺物のレベルは高くなる。しかしここでは明確な落ち込みは認められなかった。しかも整理の中途で002号址出土土器と003号址出土土器が同一個体の可能性が強くなり、002号址と003号址の取扱いに苦慮したが、混乱をきけるため区別して扱った。土器も接合するものでは

ないため分離して図示した。

遺物（第10図11）

口縁部が約1/4欠損する。縦方向に粘土紐を貼付しており、その数は8ないし9か所にわたっているものと思われる。胎土には砂粒も少量含むものの仕上げは良好となる。色調は暗褐色ないし黒褐色を呈す。

004号址・005号址

B3区のほぼ中央において隣接して検出された小ピットである。西側のものを004号址、東側のものを005号址とした。004号址のピットの規模は径約30cmで、掘り込みは中央で7cmの深さを測る。遺物は深鉢の底部が出土したにとどまった。また005号址も小ピットであり、規模は径20cmと小さく、掘り込みも004号址同様のものであったため図示は省略した。

遺物（第11図6）

壠之内式か加曾利B式の深鉢の底部となる。底部のためか文様は認められない。器面は内外ともに研磨されておりきれいな仕上げとなっている。

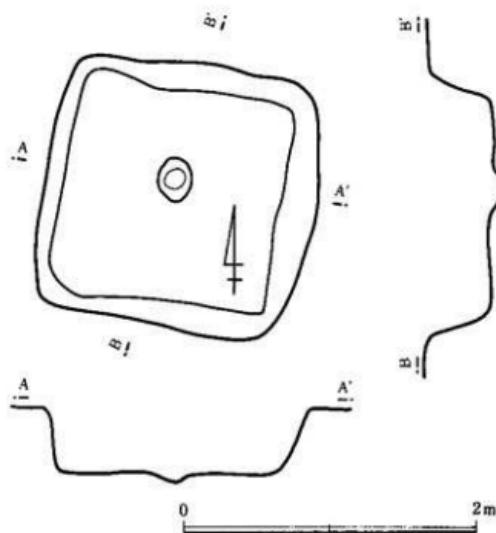
006号址（第7図）

本址はB3区の中央東よりに007号址と接して検出された。平面プランは約1.8mの方形を呈し、掘り込みは約40cmと深い。床面は第IV層のハードロームを切り込んでいるためきわめてしっかりした状態であった。床面中央に径20cm程の小ピットが検出されたが、深さは7cmと浅く柱穴としては疑問が残る。覆土は2層に分離でき、中央部に厚さ10cm程度でローム粒混入の暗褐色土が堆積し、それ以下は黒褐色土で覆われていた。出土遺物についてみると、土器は少なく石器だけが目立った。砥石が2点、石皿片1点となる。このため本址は縄文時代の遺構には間違いなかろうが時期を断定するまでには至らなかった。しかも砥石の出土から工房址的な性格とも考えられ、中央のピットもそれに関連するとも思われるが推定の域を出ない。いずれにしても一般的な住居址とは考えられない。

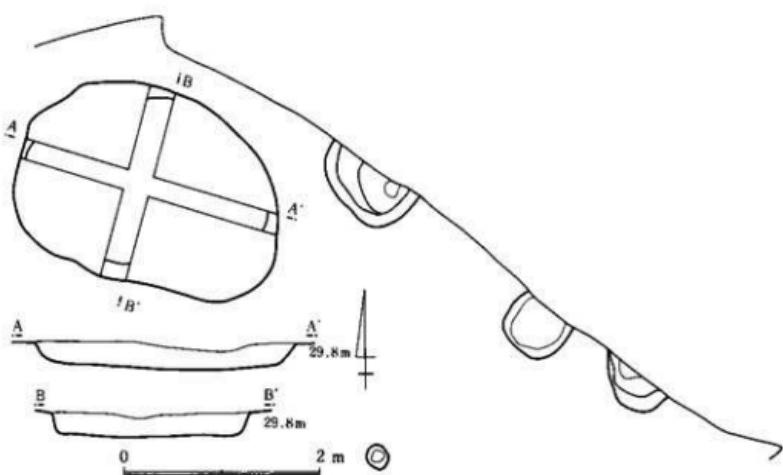
遺物（第9図5～8、第16図1・2、第17図11）

土器の出土は少なかったが4片だけ採拓できる土器片が出土した（第9図5～8）。5は称名寺式で沈線間に烈点が入る。6は壠之内I式で太い沈線とLRの繩文が施されている。7は紐線文系土器で、8はおそらく加曾利B式となろう。いずれにせよ本址の構築時期を断定する資料としては貧弱と言えよう。

第16図1は軟質砂岩製の砥石で、表面には研磨痕が残る。6点に分割され出土したものうち1点は覆土最上層部より出土した。第16図2も砥石で凝灰岩製である。表裏両面に研磨痕が認められ、表面中央は若干の凹みができる。第17図11は石皿の破片で、石材は安山岩。よく使い込まれており、中央部は1cm程の厚さでしかない。また、外縁は縁どりされ1.5cm程高くなる。裏面は凹部が5か所存在する。



第7図 006号址実測図



第8図 007号址実測図

007号址（第8図）

本址はB3区の東側、B3-61・62グリッドにかけて検出された長径2.9m、短径2mの落ち込みと3か所のピットである。ピットについては便宜的に西側からP1、P2、P3とした。前者は遺構面検出時において、覆土を含めた形での保存を考えたため中央にサブトレンチを十文字に設定し、その部分だけの排土にとどめた。その結果、掘り込みは遺構検出面から20~50cmを計り、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。覆土については暗褐色土1層であり、分層はできなかった。ただ壁ぎわだけは若干ソフトロームの流れ込みが認められた。床面は比較的良好な状態であったため住居址の可能性が強い。一方ピットは、全掘はしなかったがP1は45cm、P2は10cm、P3は25cm以上の深さを有していたが遺物の出土も見られず、階段状に掘り込まれているため少なくとも小堅穴ではないことは間違いない。覆土の状態も上面では前者と大きな差はない、縄文期の所産と考えられたが積極的にそれを裏付ける根拠も発見されなかつた。

008号址

本址はB3区を中心にして検出された溝状遺構である。中心部では約30cmの深さを有し、弓状にゆるやかに立ち上がる。幅は約4mと広いが、堆積土はローム粒及びローム塊混入の黒褐色土でやわらかい状態であったため明らかに後世のものとなろう。それに相当する遺物の出土は認められなかつたため具体的な時期を限定するまでには至らなかつた。

遺物（第9図9）

本址からは流れ込みによると思われる土器片が若干出土した。9は口縁部片で微隆起が付されているところから加曾利E式終末期のものとなろう。

009号址

本址も図示しなかつたが008号址同様の溝である。C2区の北側中央でその一部が検出された。幅は約1mで、中央部の掘り込みで15cm程度と浅い。覆土は暗褐色土でローム粒を多く含んでいた。本址での出土遺物は皆無であった。

その他、本調査区域のB4区からも若干の土器がしたので図示（第9図10~16）した。10は堀之内I式であり、12~15は加曾利B式となる。なお14は浅鉢か台付となろう。15の表面は条痕であり安行期に入るかもしれない。

第2節 グリッド出土の遺物

1. 土器

本遺跡から出土した土器は縄文中期から晩期に及び、後期に属する土器群が主体を占める。以下、これらを分類して簡単に説明を加えておく。

第1群土器

中期の土器群で量的には遺構を伴う阿玉台式期に属するものが多かつた。

第1類 (第12図1~10)

阿玉台式土器に属するもので口縁部を中心に探拓した。文様は半截竹管による連続爪形文や押引き文等で構成される。他に7では2mm程の円形刺突文や9のような細繩文を施すものもある。1・2・5・10は波状口縁の一部であり、胎土には雲母を含む。4・6・9には雲母が認められない。

第2類 (第12図11~19)

加曾利E式土器に包括されるもので、新しいタイプとして認識できるものである。11は加曾利E II式で、12は地文が撚糸で連弧文の一部が認められる。13~16は加曾利E III式で太い沈線が特徴的であり、沈線に添って刺突文の巡るもの(15)もある。18・19は同一個体の土器で、細い沈線の下を6~7本の条線を施す。17は微隆起が横方向に走る。E IV式の特徴を有する。

第2群土器

後期に属する土器群を一括した。

第1類 (第12図20~27, 第13図1~4)

いわゆる称名寺式土器で、文様によりさらに細分が可能となるが、ここでは量的にも少ないので一括して説明する。20~23は太い沈線で区画された中を繩文で満たす。20は波状口縁の一部である。24~27、1は沈線は前者と同様となるが、繩文は使用せず刺突文に変化する。1は大胆な棒状工具による刺突が施されている。2・3は沈線間の刺突文が一列で整然と配される。4は沈線のみの文様構成となる。これらは量的には少ないものの一連の変化が窺える。

第2類 (第10図3・4・6, 第13図5~25)

堀之内I式の特徴を有するものである。本類では実測可能なものが3点出土した。第10図3は口縁部から脣部にかけて約1/3が遺存しており、器面は無節の繩文を横方向に回転させるだけである。口唇部にだけ沈線を使用する。第10図4は推定口径が約10cmの小形土器である。器面にはLRの繩文だけが施され、口縁の頂部に円形の刺突文を2個配置する。第10図6は第13図22と同一個体で口辺部だけに文様を施す。脣部は無文となり、太い隆帯によって区画されている。器面はヘラ状工具による磨きが施され、概して丁寧な作りとなる。口縁は存在しないが、口縁の内弯する鉢形土器となろう。その他は地文が繩文でその上に沈線を施すことにより文様を構成するものが多い。第13図23は脣部が無文で口縁部に沈線及び隆帯が巡る。同24は無造作に間隔の粗い条線を施している。

第3類 (第10図7~9, 第14図, 第15図1~9)

加曾利B式土器を一括した。中でも第14図1~4は加曾利B I式の特徴を有している。その他の大半はII式となろう。第14図5~10は浅鉢か台付となり、5・6は「く」の字状に変化する部分である。7は底部にまで繩文を施している。第14図21や第15図2はより新しいタイプと考えられる。第15図3~7、9は紐線文系の土器群で、口縁直下に粘土紐を貼付しその上を指

頭による押圧を加える。粘土紐は2本のもの（4）もある。

第4類（第10図10、第15図10～15）

安行I・II式と見做されるもので量的には少ない。第10図10は口縁部が約1/5程度の遺存にすぎない。いわゆる帯縄文系の土器で、口縁は平縁となる。細いがはっきりとした沈線間にはR Lの縄文が施される。第15図の13は扇状の把手部に穿を有す。同10～12は縦縄文系土器で、10のように丸味を帯びた口縁部と弯曲した胴部の作りは安行II式の特徴をよく表している。同15も同様な器形を呈するものと思われるが、LRの縄文と太い沈線により文様を構成する。14は器面の風化が著しい。本類より後出するものかもしれないが便宜的にこの中に含めた。

2. 土製品（第9図17～32）

土製品としては11点の土錐と5点の円盤状土製品が発見された。土錐はB3区から4点出土し、C4区から5点出土した。C4区での出土は本調査地区が入っており当然の出土となろうが、B3区はトレンチ発掘が主であるため調査面積から比較すると出土量は多いものと思われる。

17～20は阿玉台式土器の破片を利用したもので、17はその口縁部にあたる。21～27は加曾利E式となり、21・22は沈線間の縄文が磨消されている。因みに22の縄文は複節のLRである。28～32は加曾利B式土器を利用して、31は梢円形となるがその他は円形に整形される。土錐のような切り込みは全く認められない。

3. 石器

本遺跡で出土した石器には打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、石鎌、砥石、軽石、敲石、磨石、石皿、台石の他に1点だけ装飾品である玉が出土し、器種としてはバラエティーに富む。ただ量的には図示しただけである。以下、器種ごとに簡単に説明するが、遺構出土品はここでは触れない。

打製石斧（第17図1）

欠損品が1点出土した。分銅形を呈するものと思われる。表面は大きな剝離によって整形し、裏面では自然面を残す。石材は砂岩。

磨製石斧（第17図2）

刃部を欠損する。遺存する頭部は両面がよく研磨されている。石材は砂岩。

石鎌（第16図9～14）

6点出土した。9は小形で裏面の中央に自然面を残す。その他は欠損品はあるものの形のよく整った石鎌といえよう。13は薄い剝片を利用して、両面に一次剝離面を残す。石材は9・12が黒曜石。10、11、14がチャート。13は頁岩となる。

砥石（第16図1～3）

1・2は遺構内出土である。3は砂岩製で欠損部が大きい。表面は研磨により若干凹みがで

きている。

軽石（第16図4～6）

3点出土した。出土地点は006号址、007号址を精査した際に拡張したグリッドからであるが、遺構との直接的な関連は認められなかった。4は下部が欠損するだけで、周囲は整形されている。5の一部にも整形痕が認められるが形状を変えるまでには至っていない。6は完全な成品であり、偏平に形を整え、右上部が円形に穿孔されている。孔の大きさは径4mmほどである。

敲石（第17図3・4）

2点出土した。いずれも砂岩製で欠損品となる。3の原形はかなり大きかったものと思われる。下部に打痕が残り、表面は滑らかなところから磨石としても利用したらしい。4は偏平な河原石を利用したものであろう。下部の打痕は著しい。

磨石（第17図5～9）

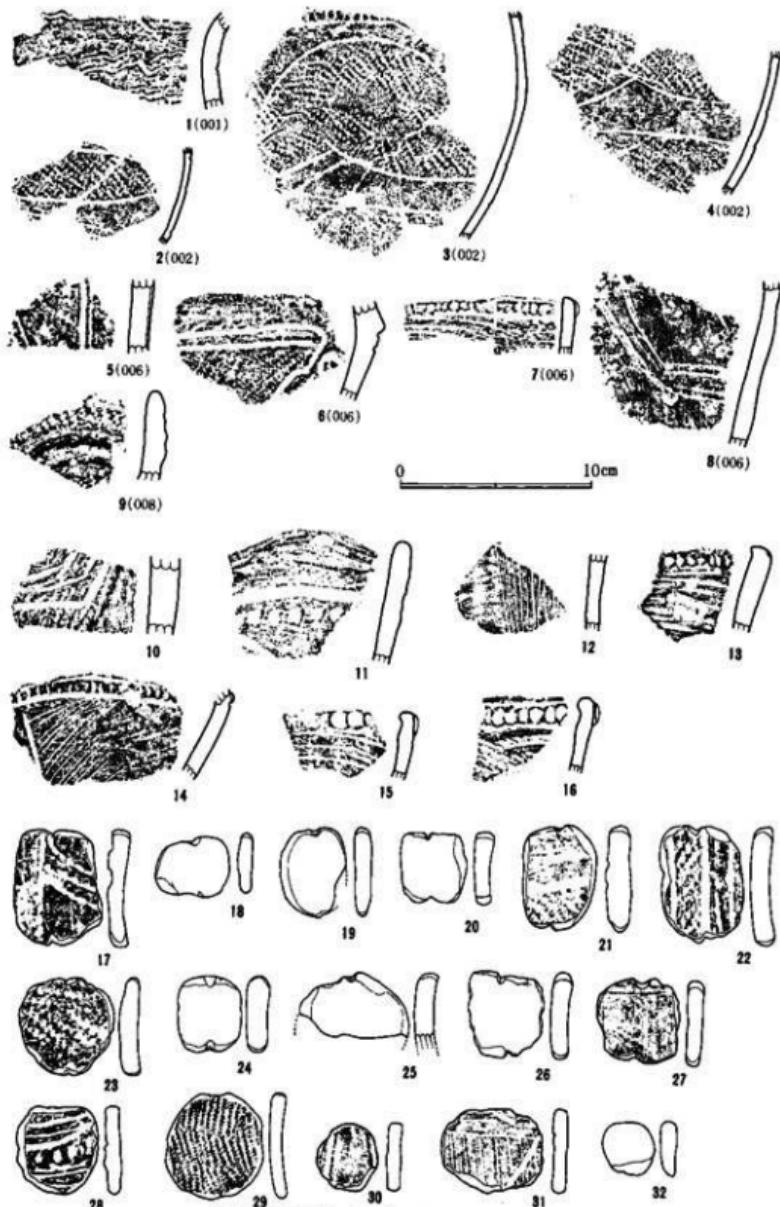
欠損品も含めて5点出土した。7の表面は円形でかつ滑らかな面を呈しており、長期間の使用を思わせる。8の表面は光沢を帯び、側面には若干の打痕が認められる。9は完形品で上下に著しい打痕を残す。石材は5・6が安山岩、7が砂岩、8・9が石英安山岩となる。

台石（第17図10）

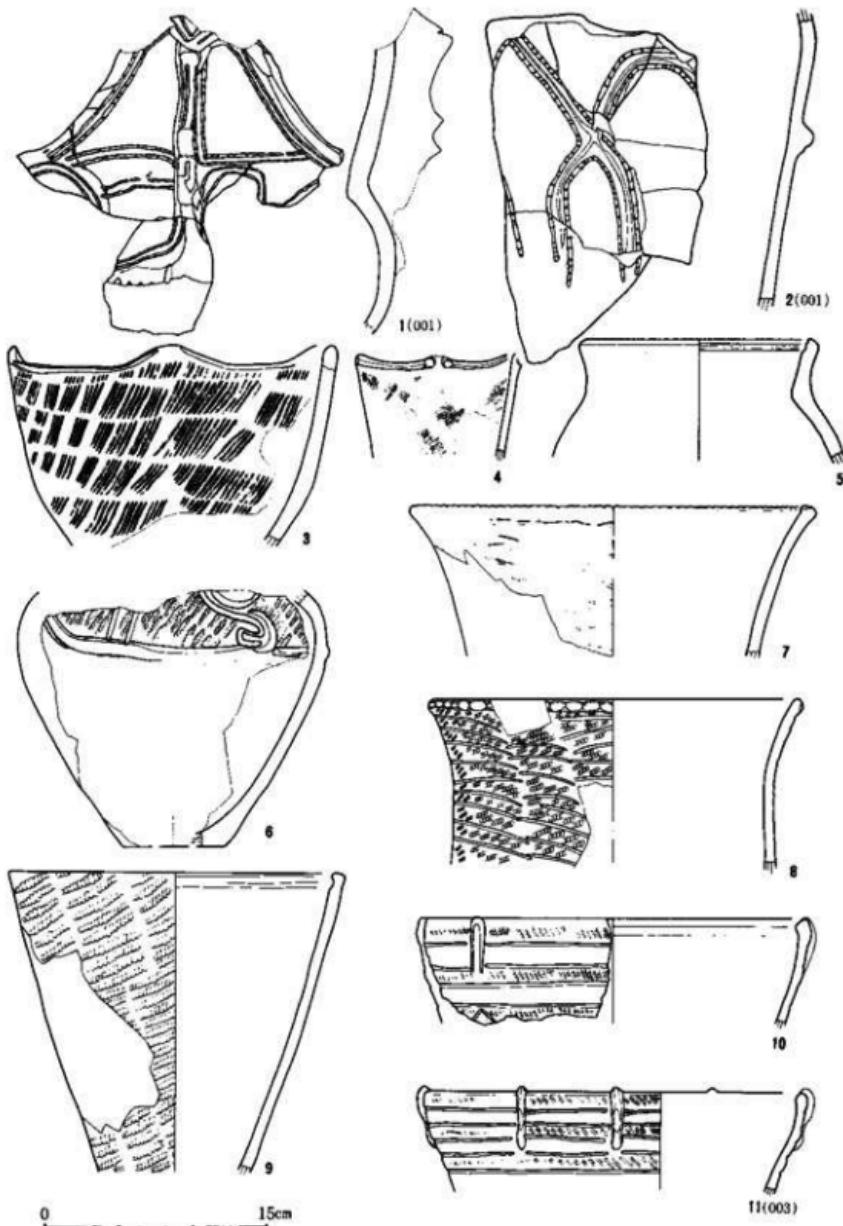
10の原形はかなり大きな形状を呈していたものと思われる。台石として使用したものと考えられるが、表面は滑らかであるところから破損後は磨石として再利用していたらしい。石材は凝灰岩。

玉（第16図7）

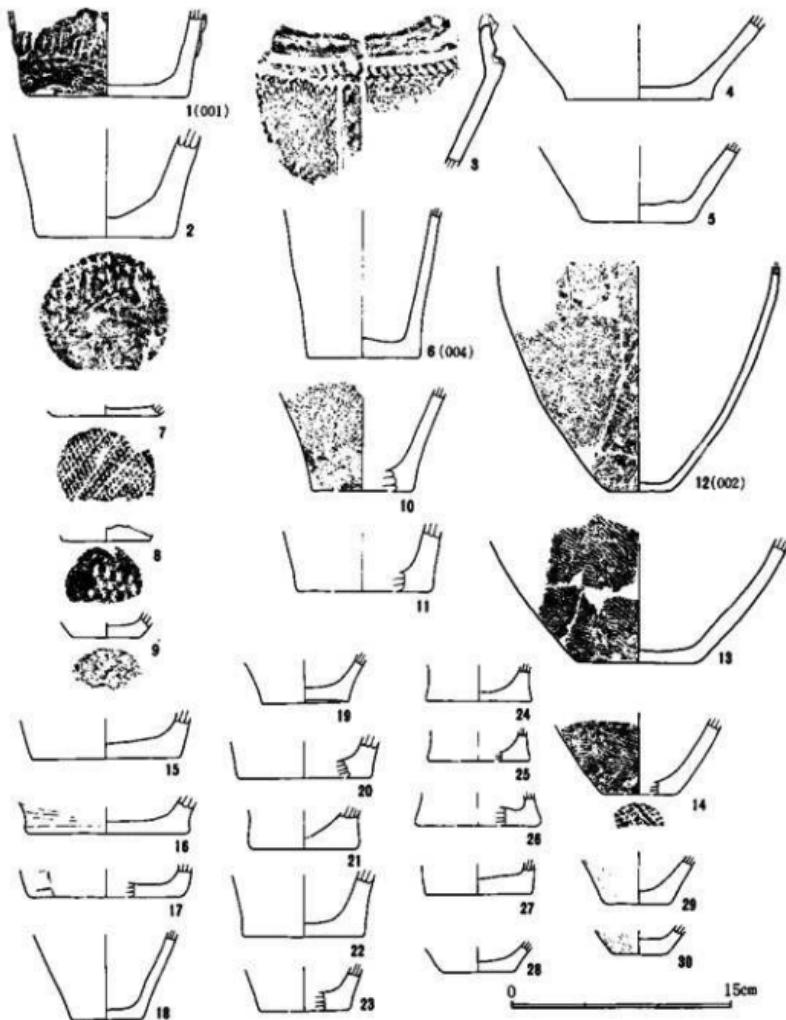
縄文期の玉がB4区の東端トレンチから1点出土した。中期から後期にかけてのものであるが明確な時期を断定するまでには至らなかった。石材は白色細粒凝灰岩で径6.5mmの孔がきれいに穿たれている。色調は乳白色で、表面はヒビ割れを生じているものの完形品である。



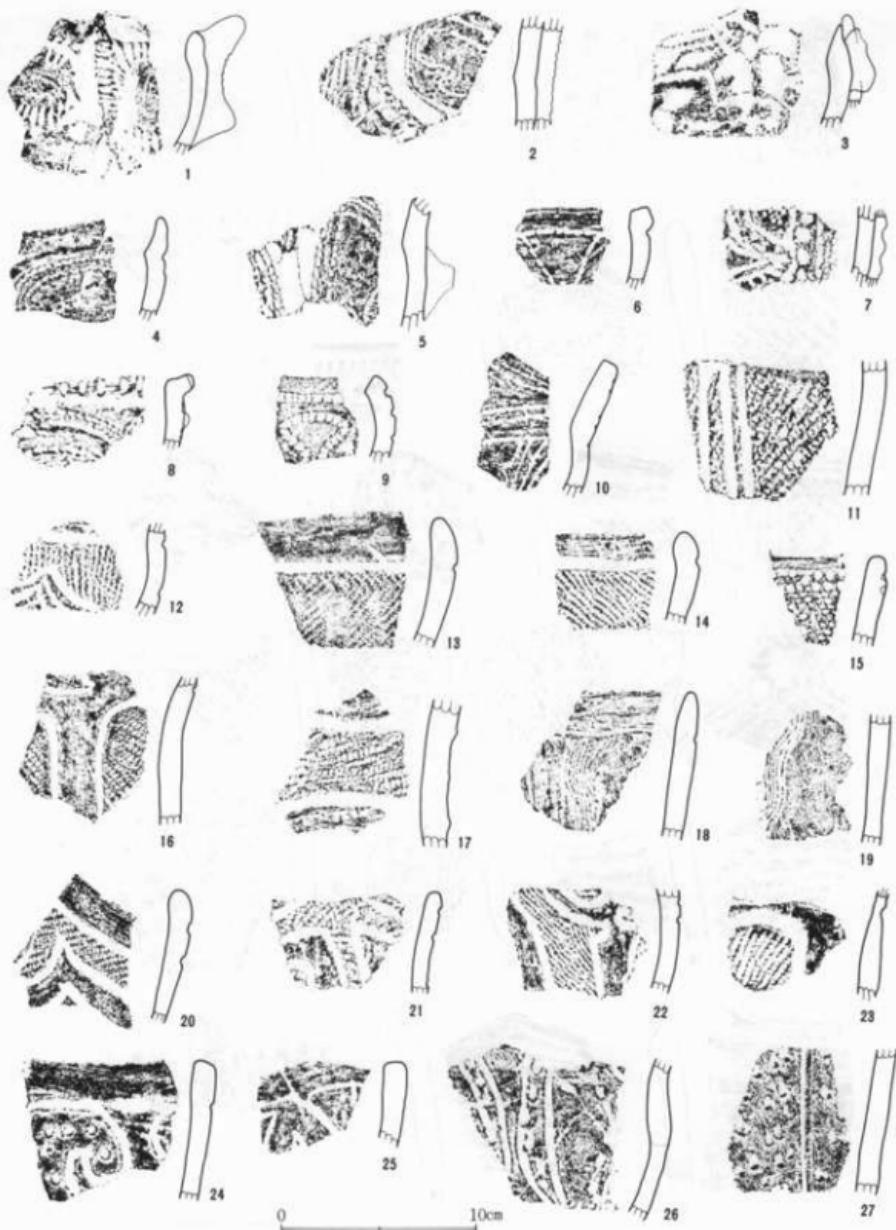
第9図 遺構内出土土器・グリッド出土土埴拓影図



第10図 出土土器実測図(1)



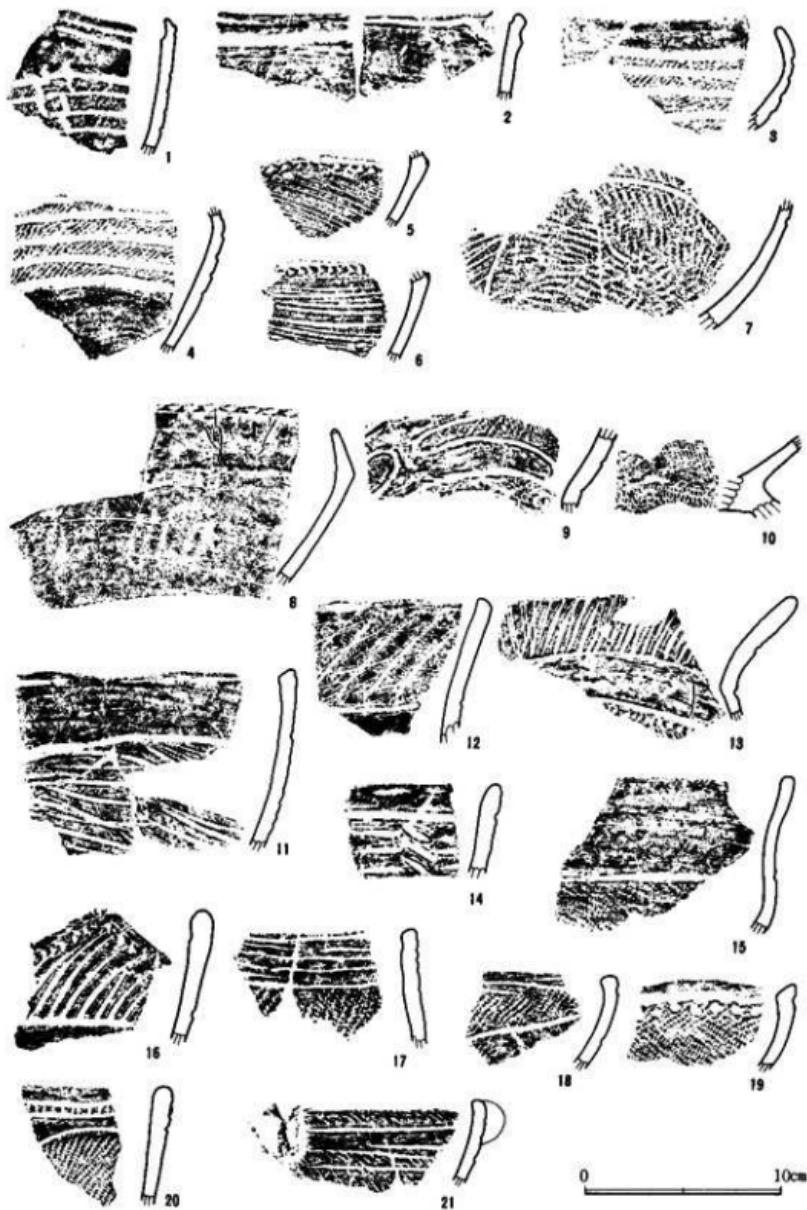
第11図 出土土器実測図(2)



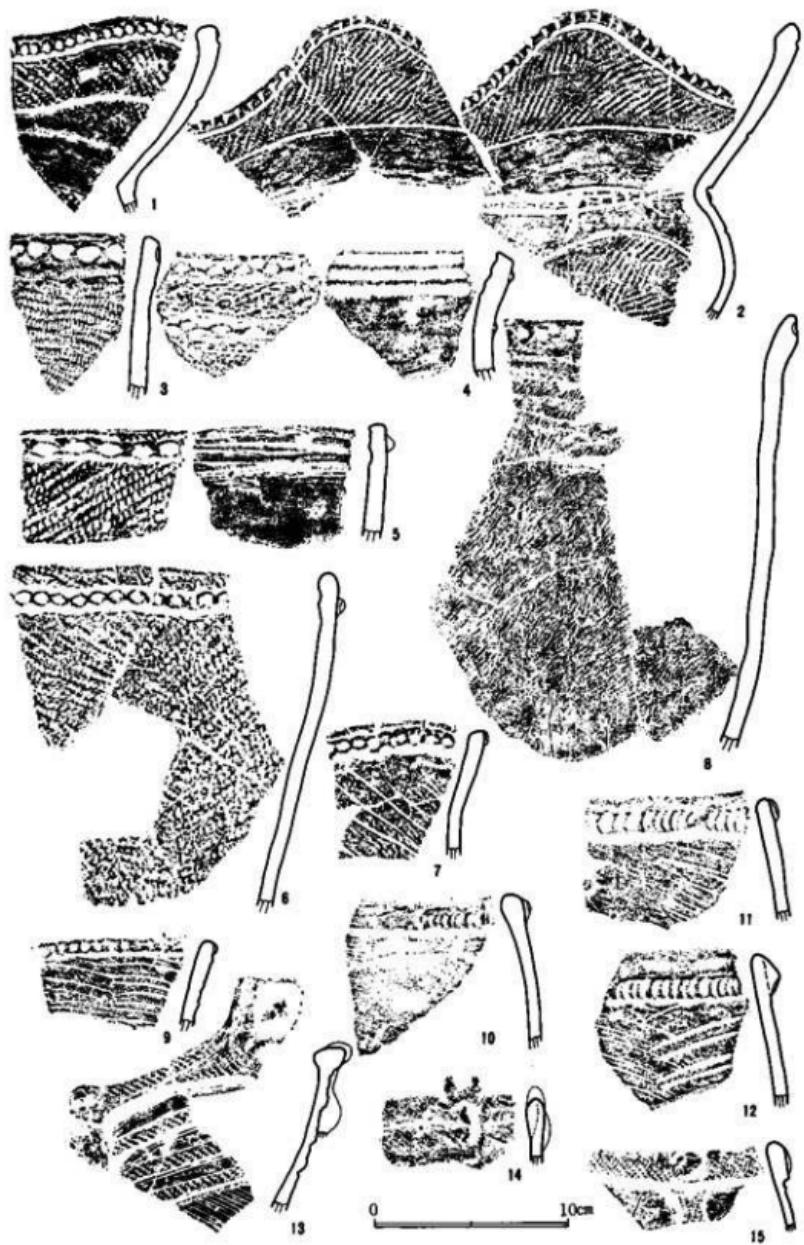
第12図 グリッド出土土器拓影図(1)



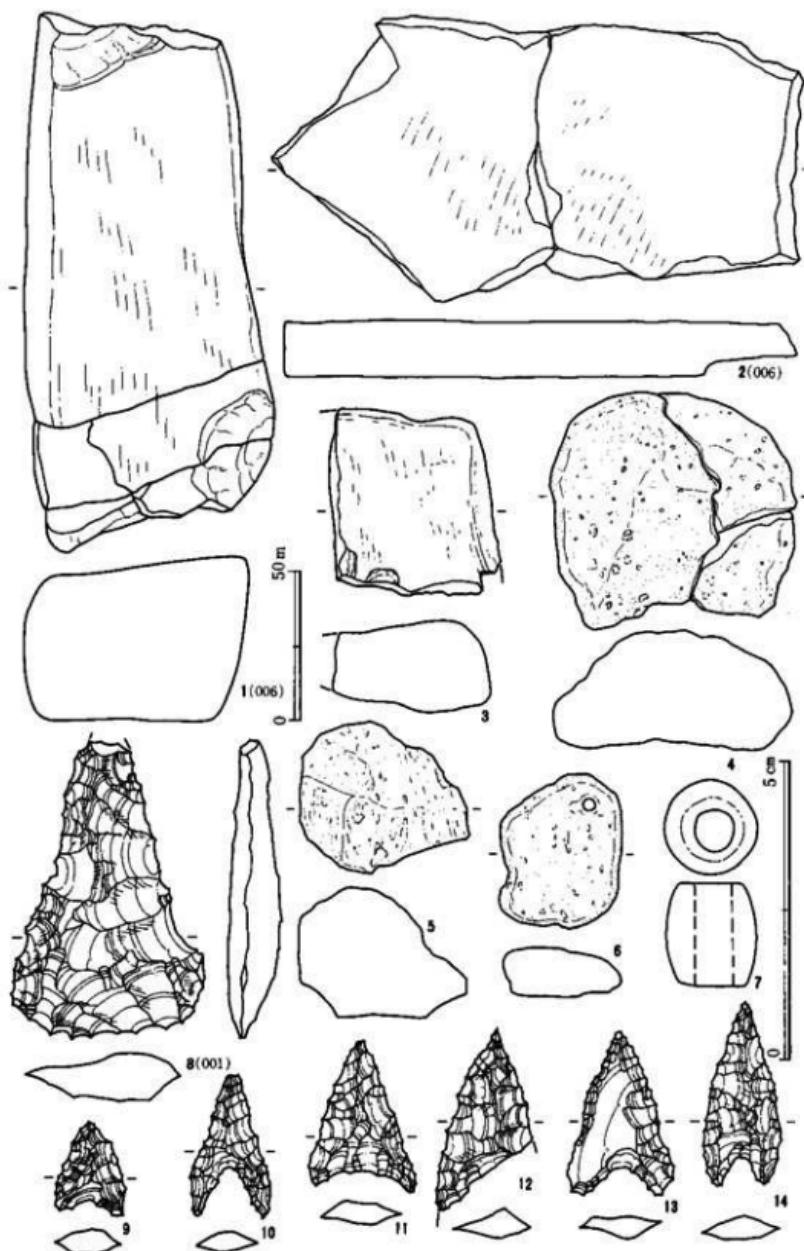
第13図 グリッド出土土器拓影図 (2)



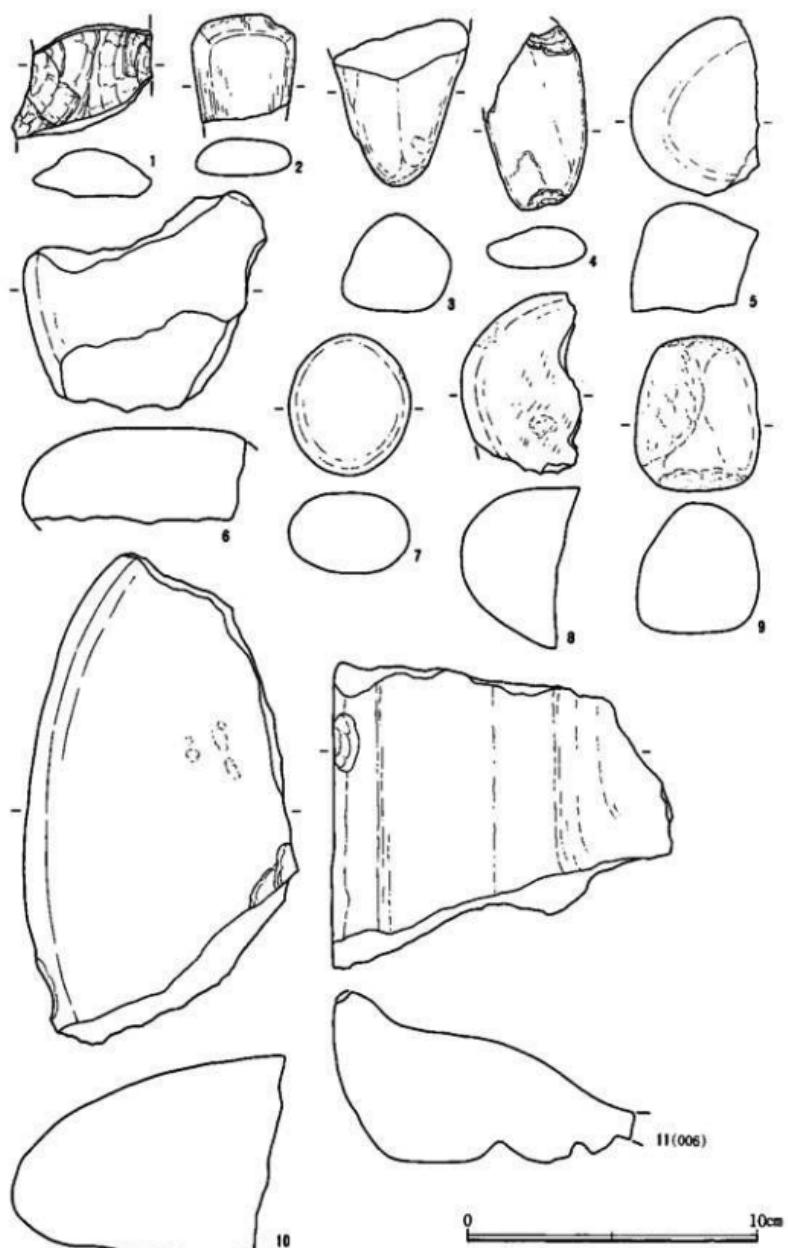
第14図 グリッド出土土器拓影図 (3)



第15図 グリッド出土土器拓影図(4)



第16図 出土石器実測図 (1)



第17圖 出土土器實測圖 (2)

第3章 結語

今回調査した地点は貝塚こそ検出できなかったものの加曾利貝塚と同一台地上に位置しているため遺跡名としては加曾利貝塚として取扱った。現在、千葉県下では消滅してしまった貝塚も含め、約550か所が確認されており、とりわけ東京湾岸には濃密に分布している。その中でも千葉市では150か所の貝塚が知られており、縄文時代中期から後期にかけて旺盛を極めた貝塚文化的一大中心地でもあった。加曾利貝塚は周知のとおり日本最大の貝塚で、南北二つの馬蹄形、環状を呈した大貝塚により構成されている。また先学諸氏によっても過去幾多にわたる調査が試られ、多くの雑誌等に紹介されてきた。中でも著名なものは戦前に大山史前学研研究所による調査がある。^{*} B地点を中心実施され、後期の土器群を中心に石製品、骨角貝製品、土製品、人骨、その他自然遺物についても詳しく述べられている。これらの調査の結果、関東地方における縄文式土器の編年学的研究に果した役割は大きく、加曾利E式・B式という形式名の存在がそれを如実に物語っているといえよう。その後の大きな調査と言えば、昭和37年度から開始された加曾利貝塚の保存・整備を目的とした千葉市教育委員会による調査があり、その成果は博物館調査資料として発表されている。^{**}

調査区域は、いわゆる加曾利南貝塚の縁辺部にあたりコンクリート工場跡地となっていた場所で表面観察では整地、建築等によりかなりの部分が破壊されているように思われた。そこで遺跡の範囲確認と同時に推積土の状況を把握し、遺跡の遺存度についても見極めるべく確認調査を実施したわけである。その結果、前述したように部分的には第IV層のハードロームまで擾乱が及び、遺跡の遺存状態を考えると決して良好とは言えなかった。また、遺構・遺物についてみると、南貝塚に接する調査区域からは若干の住居址、埋甕等が検出されたが概して希薄な分布を示すにすぎず、遺物の出土量も加曾利貝塚という名称に比しては平箱5個と少ないもののように思われた。

住居址内の内1軒は中期の阿玉台期に所属するもので、この時期の遺構は県下でも検出例は少なく、しかも南貝塚に接するという点では貝塚を構成した初期の人々とも思われるため貝塚全体を考えるうえでは一応の成果となろう。また、隣接して検出された埋甕は曾谷式ないし安行I式と見做される土器が出土したところから当時では貝塚の外郭の数十m先の範囲にまで生活跡が及んでいることが確認できた。むろんこの区域は現状保存されたわけであるが、縄文後期末葉の遺構は南貝塚縁辺部にまでわたっていることが確認できた。以上のことから加曾利貝塚内の集落址は縁辺部を含めるとかなりの規模の大きさになると思われる。

* 堀越正行他 1983 「千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書」千葉県教育委員会

** 大山史前学研究所 1937 「千葉県千葉郡都村加曾利貝塚調査報告」史前学雑誌 9-1

*** 武田宗久他 「加曾利貝塚」 I~IV 千葉市加曾利貝塚博物館

写 真 図 版



1.発掘前遠景



2.確認トレンチ
東から(C2・3・4-00)



3.確認トレンチ
西から(C2・3・4-00)



1.確認トレンチ発掘状況



2.調査区北側土層セクション



3.溝状構造検出状況
(B3-85)



1.001号址検出状況



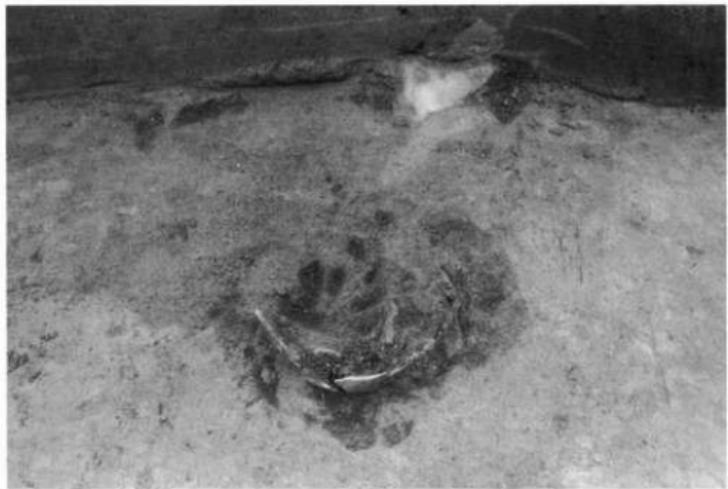
2.001号址遺物出土状況



3.001号址全景



1.002号址遺物出土状況



2.002号址遺物出土状況



3.002・003号址遺物出土状況



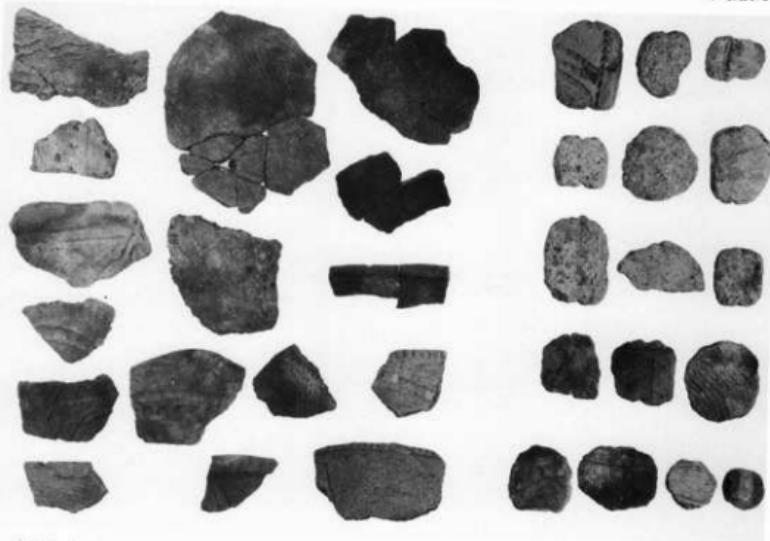
1. 遺物出土状況(C 3-20)



2. 006号址全景



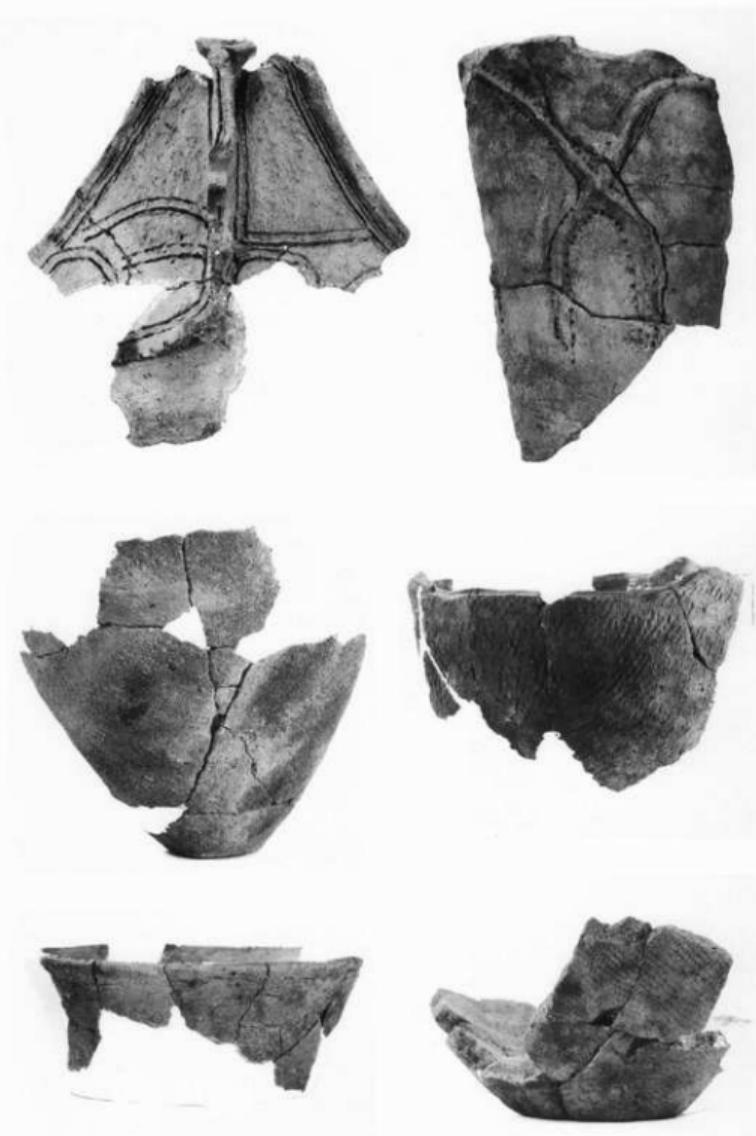
3. 006・007号址近景



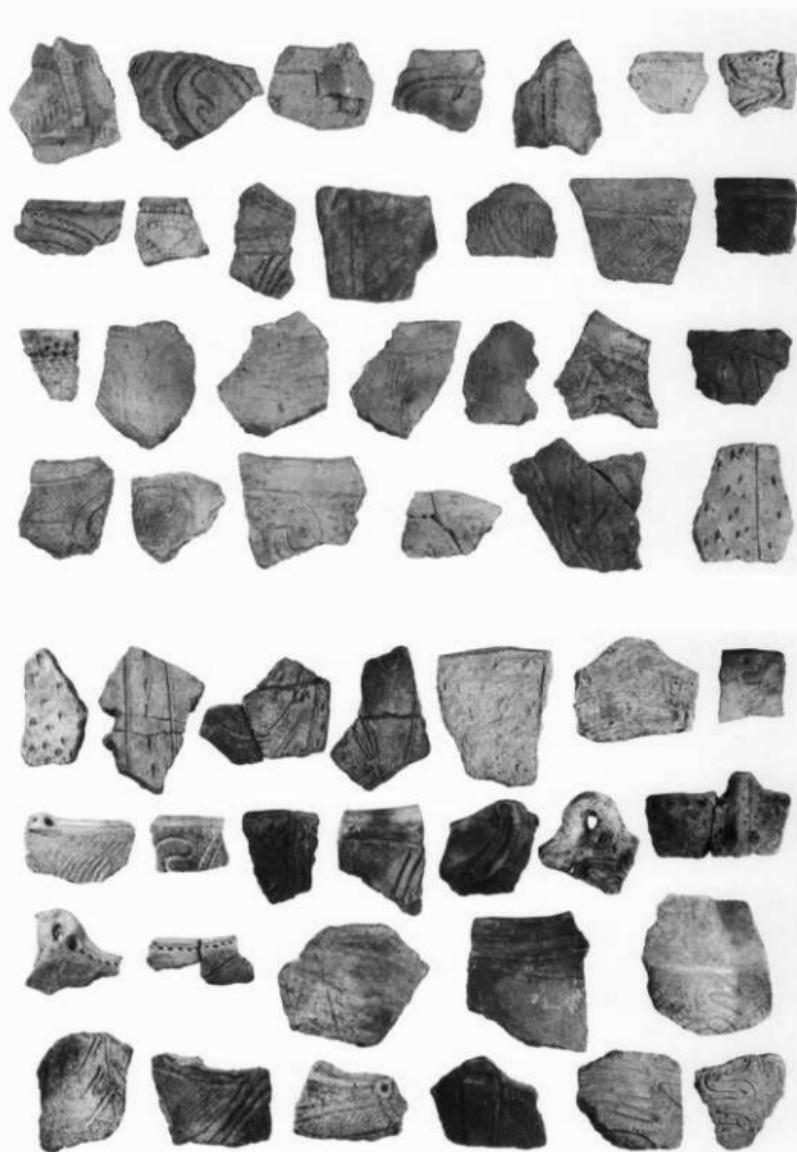
1. 遺構内出土土器・グリッド出土土製品



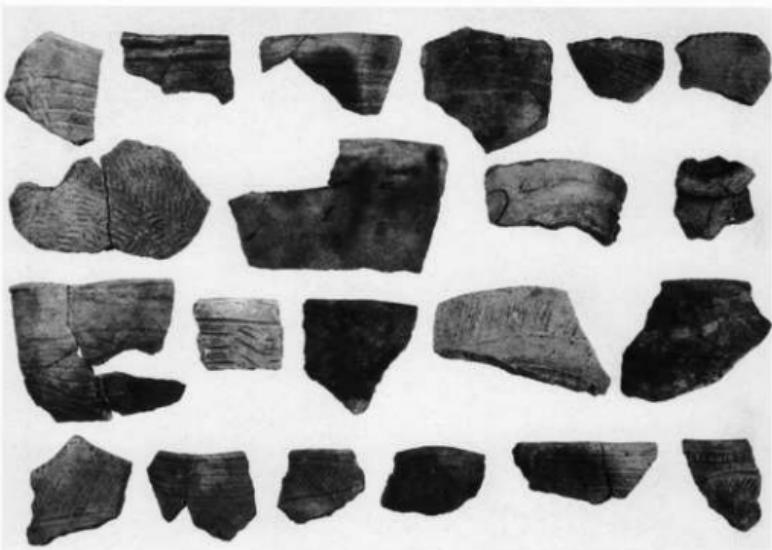
2. グリッド出土土器(1)



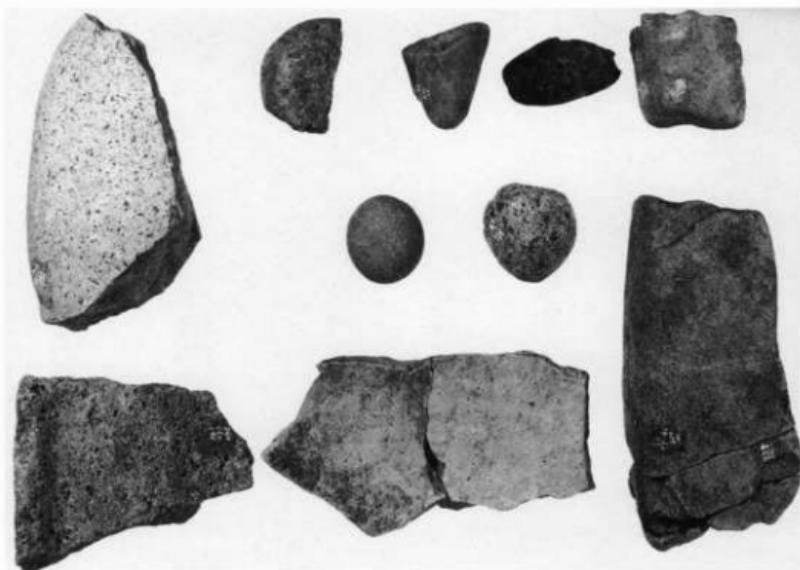
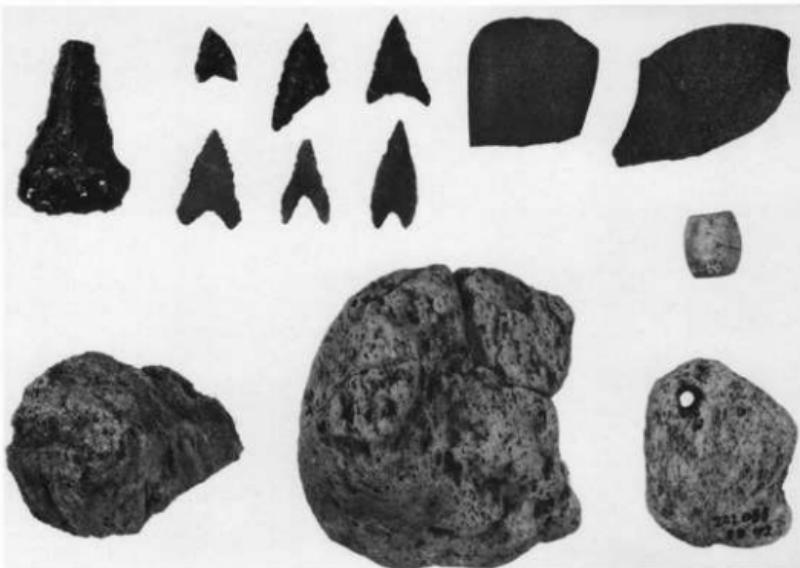
グリッド出土土器(2)



グリッド出土土器(3)



グリッド出土土器(4)



遺構内・グリッド出土石器

加曾利貝塚

—県営桜木第二団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

昭和61年3月25日 印刷

昭和61年3月31日 発行

発行 千葉県都市部住宅課
千葉市市場町1番1号

財団法人千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社正文社
千葉市都町2丁目5番5号
